

九州諸方言アクセントの系譜

奥村, 三雄
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7179477>

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 23, pp.55-79, 1978-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



九州諸方言アクセントの系譜

奥村三雄

目次

- 一 九州諸方言のアクセント―系譜論のために
- 二 豊前式の成立
- 三 筑前式と西南部式との分派
- 四 筑前式諸方言の成立
- 五 西南部式諸方言の成立
- 六 いわゆる一型式について
- 七 九州諸方言アクセント分派の時期
- 八 アクセント以外の方言的特徴について
- 九 結びに代えて―付表（表一―表五）と付図

一 九州諸方言のアクセント―系譜論のために

（一）九州諸方言のアクセントは、既に指摘された如く^{（一）}いろいろ複雑であるが、ここでは或巨視的な立場から、その系譜関係を考えようとする。

九州諸方言アクセントの系譜

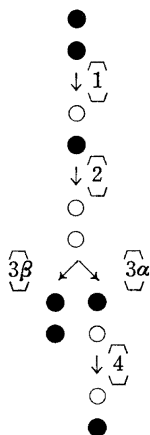
巨視的と言えば、本稿では内的変化⁽²⁾という観点を中心に考察を進めるが、これは話を簡単にする為という事よりも、むしろアクセント現象の特性という様な面に関係する。即ち、アクセントは衆知の如く、言語現象―ひいては人文的諸現象の中、最も自然科学的（或意味で非人間的）性格が著しい為、その変化も内的変化として説明すべき面が多いのである。例えば国語史一般における外国語の影響関係を見ても、語彙論的な面などは、漢語や西洋語の影響が極めて著しいが、アクセント史の面では、それが殆んど認められない。

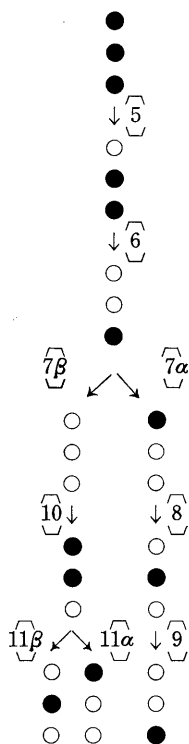
(2) 所で、アクセント変化をいわゆる内的変化の面から見た場合、その変化の一般的傾向性としては、さし当り次の如き事が言えよう。▲一般に型の統合は起こり易いが、型の分化は起こり難い。型の分化を想定する場合は、概ね分化の条件がはっきりしている場合に限られる▽

例えば九州諸方言アクセント（下記の表一、表四を参照）の中、二拍名詞に三つの型が存する豊前式は最も古い姿を示し、各地の一型アクセントは最も新しい姿と考えられる。ただ三型アクセントでも、豆酸式は、助詞接続形の○●▽型（I・II類の第二拍広母音語）と○○▼型（同第二拍狭母音語）の対立に関し、第二拍母音の広狭というはつきりした分化条件が認められる故、二型のG（旧筑前）式から変化した姿と見られる。

(2・1) 更に一般的抽象論として、アクセントの内的変化に関する傾向性を考えた場合、一おう次の如き変化方向が多く、その矢印に逆な変化は稀である。

二拍語





尤も、右記はあくまで、内的変化としての一般的な傾向性であり、実際問題として、その逆の変化も全くないとは言えない。特に他方言の影響など外部的要因が働いた場合は、例外的現象がめだつ様である。

なお、この問題については、『東洋語研究』3号や『国語と国文学』50巻6号の金田一春彦氏論文を参照されたい。

(3) 一方、地域的分布相の解釈に関しては、『解釈と鑑賞』34巻8号・『国語学』104集・『新編国語史概説』（有精堂刊、春日和男氏編）の拙稿など、しばしば述べた事があるが、とりあえずここでは、地域的連続性の原則につき略述しておく。

△もともと言語の伝播は、特別の事情のない限り、地を這う様に行われるものである故、地域的連続性のない方言は、系統的にも親近性が認め難い△というのが、この原則である。これについては、言語の飛躍的伝播という特殊事情等も考慮せねばならない訳で、問題も残るが、一つの原則として無視できないものがある。

(3・1) 先ず、九州諸方言アクセント（下記第九項の分布図を参照）は巨視的な、型式の異同関係からして、豊前式（豊前・豊後の各大部分）・筑前式（筑前大部分や壱岐・対馬）・西南部式（薩隅大部分や、肥後西部・肥前南部、及び各属島など）・一型式（日向・筑後の各大部分や、大隅北部・肥後東部・肥前北部等）の四グループに分ち得るが、この場合、その各グループがそれぞれ、地域的に連続した一地帯をなす事も、見逃せない所であろう。

また薩南枕崎や種子島北部あたりのアクセントは、型の姿から見て、表二・表四のE式（つまり西南部式の祖アクセ

ント)に酷似したものであるが、それらを隣接諸方言と切り離して古い姿と見なすのは、地域的連続性の面で多少問題がある故、本稿では「枕崎式ⅡE式」という断定をさし控えた。

更に表四では、ⅠⅡ類のアクセントにおいてかなりの差が認められる藤津式・杵島式・北肥後式の三者を一グループと見なしたが、これも、ⅢⅣⅤ類アクセントの共通性という事の他、地域的連続性の面を考慮したものである。

(3・2) 地域的連続性と言え、地続きでなくても、舟便が陸上交通以上の意味をもつ様な場合は、これを或種の地域的連続性とも見なし得る。

例えば表三で、郷浦式(苓岐大部分)と勝本式(苓岐西北部)の相関性や、峰式(対馬大部分)と豆酸式(対馬南部)の關係よりも、勝本式と峰式の親近性を重視した事などは、一見、地域的連続性の原則に矛盾する様だが、つまりは、 Δ 曾^かつて勝本から対馬(主として厳原)への海上交通が、各島内の陸上交通より便利だった ∇ 時代の存在を示すのであろう。現に、対馬などはごく最近まで、島内の交通にも舟便によらざるを得ない場合が多かったのである。

(3・3) なお、地域的連続性という事をごく形式的に解釈すると、ABC型分布において $A \downarrow C \downarrow B$ という様な変化の想定はなるべく避けるべきなのであるが、実際問題としては、必ずしもそう理屈通りには行かない。例えば Δ 豊前式(九州東北部)・一型式(九州中部)・西南部式 ∇ の如きアクセント分布(下記分布図を参照)において、本稿では、 A (豊前式) $\downarrow C$ (西南部式) $\downarrow B$ (二型式)の変化を想定した。即ち、 Δ 九州全体がもともと豊前式だったが、薩隅及び日向・肥前肥後地方が一旦、概ね西南部式に変化し、その中、異ったアクセント―つまり豊前式(及び筑前式)に接続する地帯が、更に一型式に変化した ∇ という様な考え方も充分成立し得るわけである。

(4) ともあれ、かかる諸方言アクセントの系譜考察方法については、いろいろ問題も残る訳であるが、以下とてあえず、如上の観点からして、九州諸方言アクセントの系統關係を具体的に考察してみよう。なお本稿では、その考

察結果を、第九項の表一、表五及び分布図の形で示した故、それぞれ参照されたい。

二 豊前式の成立

(1) 前述の如く、豊前式は九州諸方言アクセントの古い姿を示すものと見られるが、これも他の日本語諸方言(表五を参照)の場合と同様、一おう名義抄式からの分派と見られる。所で、名義抄式から豊前式への変化に関しては表一のA式・B式の如き中間段階が想定される。

(2) この場合、名義抄式↓A式におけるⅡ類及びⅤ類の変化はやや特殊な様だが、つまりは、有核型(アクセント核つまり音の下りめの有る型)の回避傾向と言えようか。即ち、Ⅱ類及びⅤ類にアクセントの無核型(アクセント核の無い型)化が起こつて、それぞれⅠ類及びⅣ類に合併したと考えられる。そう言えば、Ⅰ・Ⅱ類の合併とⅣ・Ⅴ類の合併とは相互に関係があるらしく、北奥・越後・遠州・出雲・九州など、Ⅰ・Ⅱ類の合併している方言では、Ⅳ・Ⅴ類の区別が殆んど認められないのである。

ただ例外的存在として、出雲西北部方言では、従来の説に反してⅣ・Ⅴ類の区別が或程度認められそうである。例えば簸川郡大社町あたりでは、Ⅰ・Ⅱ類が完全に合併しているのに、Ⅳ・Ⅴ類の区別が認められ、「息・帯・錐・麦」などⅣ類の第二拍狭母音語は○●○○▽型、Ⅴ類の第二拍狭母音語「秋・鯉・鶴・春」などは●○○○○▽型をとる。⁽⁶⁾なお精査の余地もあるが、そこでは一おう、表五の旧出雲式が想定されようか。これは、名義抄式のⅣ類が前記〔2〕及び〔6〕の変化を起こしてⅢ類と合併した為、A式(つまり九州諸方言の祖アクセント)と袂を分かつた事になる。尤も、狭母音拍がアクセント核を保ち難いという出雲方言の特徴が、ずっと古くまで溯り得るならば、この旧出雲式は極めて影が薄くなり、かなり早くから大社式アクセントへの動きが存していた事になる。

(2・1) 表五に示す如く、九州や出雲など辺域諸方言では、名義抄式のⅠ・Ⅱ類が合併して京都語と袂を分かつ

た訳だが、その分派は当然、京都語でⅡ・Ⅲ類が合併した南北朝頃以前に起こったはずである。その点では、Ⅰ・Ⅲ類の合併している讃岐式諸方言⁽⁸⁾（表五を参照）も同様と考えられる。

(2・2) なお、表Ⅰの名義抄式↓A式におけるⅡ類の無核型化については、助詞が高く付いていた為、第二拍も高くなったという様な事情も考えられるし、また単独語形の無核型化に関しては、「石^{イシ}●●○」（図書寮本名義抄二二三）↓石橋^{イシバシ}●●●○（同一四九）^{イシズエ}礎^{イシズエ}●●●○（同一五三）等々、名義抄における複合語前部要素の無核型化傾向も考え合わされる。更に助詞接続形について言えば、名義抄式のV類は○●▽型を原則とする様だが、A式が分派した頃の京都語では○●▽の如き状態だったかもしれない。特殊変化と言え、表五の丸亀式におけるⅢ類の高平型化などは、A式や旧出雲式におけるⅡ類の高平型化よりも一層特殊な現象と見なされようか。

(3) 一方、表一のA式↓B式及びB式↓豊前式の変化は、それぞれに前述第一項(2・1)の如きアクセント核の後退傾向として説明できそうである。即ち、A式↓B式に関しては、Ⅲ類が前記「3α」及び「7α」の変化を起こし、ⅣV類が「2」及び「6」の変化を起こしたと考えられる。またB式↓豊前式に関しては、ⅠⅡ類が「1」及び「5」の変化、Ⅲ類が「4」及び「8」の変化、ⅣV類が「3α」及び「7α」の変化を、それぞれ起こしたと見られるのである。

尤も、右記Ⅰ・Ⅱ類に関する「1」及び「5」の変化は、或はB式において既に起こっていたかもしれない。しかし、A式においてその変化が起こっていたことは考えられない。A式の状態でその変化が起けると、Ⅰ・Ⅱ類の単独語形がⅣ・V類と合併してしまうからである。またⅢ類とⅣ・V類とは、結局同様の変化過程をたどった事になるが、Ⅲ類の変化は常にⅣ・V類の場合より一歩ずつ先じたはずである。Ⅳ・V類の変化がⅢ類に追いつくと、Ⅲ類とⅣ・V類の合併が起こるからである。

三 筑前式と西南部式との分派

(1) 豊前式(豊後地方も) から変化した九州諸方言アクセント(下記の分布図を参照)は、巨視的に見て、筑前式(筑前の他、杵岐対馬地方を含む)・西南部式(薩隅や肥後西部・肥前南部及び属島各地)・一型式(日向や東肥後・北肥前など)の三者に分ち得るが、その一型式は他の二者から更に変化したものと見られる。

(2) つまりは、△豊前式のⅠ・Ⅱ類が変化してⅢ類に近づいて行った▽のが筑前式、△豊前式のⅣ・Ⅴ類がⅢ類に合併した▽のが西南部式という事になる訳である。而して、それらは何れも、表二のC式の如き状態を経て分派したと考えられるが、そのC式は、豊前式のⅠ・Ⅱ類が〔6〕の変化⁽⁷⁾を起こしたものである。新豊前式として、豊前・豊後地方に或程度認められそうである。

(2・1) C式↓D(旧筑前)式の変化については問題がない。C式のⅠ・Ⅱ類が〔2〕及び〔7β〕の変化を起こし、Ⅲ類との合併に一步動きたしたが、D式という事になる。

(2・2) これに対し、西南部諸方言におけるⅢ類とⅣ・Ⅴ類の合併過程については、調価の面に問題があるが、一おうE式の姿を経たものと考えられる。このE式の場合、「助詞接続形は、C式のⅣ・Ⅴ類が〔8〕の変化を起としてⅢ類と合併した訳だから、単独語形もそれに準じて〔4〕の変化を起こし、○●型をとった」と見る立場があるそうだが、この考え方は、単独語形のⅣ・Ⅴ類がⅠ・Ⅱ類に合併してしまうという欠点がある。そう言えば、助詞接続形における○〇〇●▽の傾向は必ずしも異としない訳で、現在九州西南部にしばしば認められる。

更にここで注目すべきは、このE式に酷似した方言が、薩南枕崎や種子島北部あたりに現存するという事である。勿論、これらの方言もそれぞれ周囲の影響が著しいはずである故、枕崎や北種子島方言のみを薩南諸方言と切り離して、いわゆる西南部式の古い姿と見るのは、地域的連続性という面で問題がありそうである。実際面でも、枕崎方

言はⅢ・Ⅳ・Ⅴ類が●●▽〰〇●▽のユレを示し、北種子島ではⅠ・Ⅱ類が〇〇●▽〰〇●●▽のユレを示す事など、E式と異なる面も若干存する。金田一春彦氏説(教育出版社刊『日本の方言』四六頁)の如く、「現在枕崎方言は、鹿児島式↑上甕島江石式を経て成立した最も新しい姿」と考える立場も、一おうあり得るのである。但し、この金田一氏説にも問題は存する訳で、特に、△単独語形が

●	○	●
○	○	○
○	○	○

の如き上甕島式から、

●	○	●
○	○	○
○	○	○

の如き枕崎式に変化した。事情など、充分説明されているとは言えない。

現在の枕崎式(種子島北部を含む)アクセントの成立については、尚検討の余地が多いが、それはそれとして、西南部諸方言アクセントが表二のE式の如き状態を経たものである事は動くまい。右記金田一氏説でもやはり、本稿のE式に準ずる姿を、西南部諸方言の祖語アクセントとしていられる。つまり、金田一氏は、西南部式の祖語アクセントと、最も新しい枕崎式とが偶然に同じ姿をとったと見なされた訳である。

四 筑前式諸方言の成立

(1) 杵岐対馬地方を含む筑前諸方言のアクセントは、概ね表二及び表三のD式・F式の如き状態を経たものと考えられる。

(2) 筑前や杵岐の大部分(対馬南部も)では、豊前式のⅠ・Ⅱ類に關し、△●●●●●▽(豊前式)↓○●●●●(C式)↓○●●●●▽(D式)●●●●「●●●●▽」(F式)↓○●●●●▽の如き変化が起こつて、Ⅲ類と同形をとるに至った訳である。この場合、形式的理論からすれば、F式の様なややこしい型を想定せず、△●●●●●▽(C式)↓○●●●●▽↓○●●●●▽の如き変化過程を考えた方が簡明な様であるが、この考え方では、Ⅰ・Ⅱ類が●●●●●▽型をとった時に、Ⅳ・Ⅴ類と合併してしまうはずである故、採用できない。勿論、表三のF式の単独形については、なお検討の余地(例えば第二拍は、高音にも低音にも発音され得たという様な見方もある)があるが、とも

あれC式の状態から、●○・●○▽型を経由しないで○●・○●▽型に到達するには、本稿D式・F式の如き過程を想定せねばならないのである。

(2・1) これに対し、対馬大部分(峰式)や壱岐西北部(勝本式)等は、I・II類が●○・●○▽型となつてIV・V類に合併している故、D式・F式を経由せず、C式から直接的に変化したものとも言えそうだが、しかし、これらの地域のアクセントのみを、筑前や壱岐・対馬大部分のそれと別系統のものと考えるのは、地域的連続性の面から不合理である故、一おう表三の如き系譜を想定した。

(3) ともあれ、本稿のいわゆる筑前式諸方言(表三を参照)は、△概ね二拍名詞アクセントが、〔○●・○●▽〕及び〔●○・●○▽〕の二型であり、而も、III類は前者、IV・V類は後者の型に落ち着いている▽など、共通性が著しい。前記筑前式諸方言内の対立も、實際面ではかなり相対的な問題が多く、例えば「現在博多方言を本稿(表三)の郷浦式と見なし、壱岐大部分をG式と見る」様な説(金田一氏『日本の方言』三〇頁等)も存するのである。一見した所、表三の博多式と郷浦式との差は大変著しい様だが、實際問題としてその判別は容易でない面もある。何れにしてもI・II・III類には〔○●・○●▽〕及び〔●○・●○▽〕の両型が存する訳で、△その後者がI・II・III類を通じて少数勢力として存する▽のが博多式であり、△それが概ねI・II類の第二拍狭母音語に限られる▽のが郷浦式という次第。同一方言でも、人により場面によりまた調査語集の選び方によって、その間をユレるという事も、充分あり得る事なのである。

ただこの場合、現在博多方言のアクセントはやはり表三の博多式の如く見なすべきものの様である。即ち、右記金田一氏説によると、現在福岡市アクセントは、

		III
○●	●●	I
○▽	●●	II
○●	○●	IV
○▽	○▽	V

の如き状態だと言うが、⁽¹⁰⁾ 實際問題として、I・II

類の第二拍狭母音語は、「味・蟻・海老・蟹・雉子・傷・口・国・腰・鋤・杉・滝・西・藤・星・水・道・虫(以上

I類語)、石・垣^{イシ}・鍵^{カギ}・蟬^{セミ}・旅^{タビ}・梨^{ナシ}・夏^{ナツ}・肘^{ヒジ}・冬^{フユ}・町^{マチ}・雪^{ユキ}(以上II類語……)など、その大部分が○●・○●○▽型をとる。また逆に、I・II類第二拍広母音語でも、「姉^{アネ}・瘡^{カサ}・笛^{フエ}(以上I類語……)」など、●○●○▽型が若干認められる。更にはIII類語でも、「麻^{アサ}・貝^{カイ}・靴^{クツ}・桑^{クワ}・茄子^{ナス}・海苔^{ノリ}・孫^{マゴ}・股^{マタ}……」など、●○●○▽型が或程度存するのである。『九州文化史研究所紀要』18号拙稿その他も参照の事。

そう言えば演繹的に見ても、第二拍母音の広狭がアクセント型に影響するというのは、博多方言より郷浦式(竜岐大部分)にふさわしい現象と言えよう。例えば豆酸・内院など対馬南部ではI・II・III類、厳原・峰など対馬大部分ではIII類に關し、それぞれ表三の如く、第二拍母音の広狭がアクセント型に影響するが、九州本島内では、その様な傾向が殆んど認められない。

(3・1) G(旧博多式)式及び勝本式において、△第二拍狭母音語が○●▽型を保ち得ず、○●●▽↓●○▽の變化を起こし▽の場合、それぞれ豆酸・内院式及び厳原式の如き姿をとらざるを得ない事、言をまつまい。

五 西南部式諸方言の成立

(1) 西南部諸方言は何れも△I・II／III・IV・V△という簡単な調類体系を有している。諸方言相互間の対立は誠にデリケートなものであり、表四の如き系譜關係についても種々問題がありそうである。例えば、本稿で西南部式の古い姿と見なしたE式と、金田一氏が最も新しい姿と見なされた枕崎方言とが概ね一致する事など、前述の如くなのである。

(2) 具体的な調価の異同は、表四に示す如く複雑であるが、先ずI・II類の場合は、巨視的に見て概ね次の如き變化が想定される。

○●●○▼(E式) ↓ ○●●○▼(宮之浦式) ↘ ○●●○▼(鹿児島式) ↓ ○●●○▼(栗生式)
 ○●●○▼(長崎式)

右記宮之浦式の助詞接続形は、E式から「7α」の変化を起こしたものの。その単独語形は、○○型を中間段階として、E式から「2」及び「3α」の変化が起こったものと言えようか。屋久島中央部(宮之浦・尾之間等)や薩摩北部(長島西部等)・肥前中部(三河内等)あたりに散見される。

鹿児島式は宮之浦式の助詞接続形が「8」の変化を起こしたものの。鹿児島県過半や南肥後・薩南諸島各地などになり広く認められる。屋久島の尾之間・一湊や肥前の早岐あたりでは、●○▼〰○●○▼のユレが認められ、或意味での過渡期的性格を示す。

長崎式の助詞接続形●●▼は、概ね右記鹿児島式の北方つまり肥前や北肥後地方に認められるものであるが、鹿児島式の○○▼型に比し安定性に乏しい様である。例えば表四の杵島式地方(佐賀県中部)では、●●▼〰○●○▼のユレが認められるし、また長崎市など長崎県南部地方でも、ぞんざいな発音では時に○○▼型が聞かれる。一方、肥後北部(玉名郡等)や佐賀県南部(藤津郡等)あたりでは、しばしば●●▼〰○●○▼のユレが認められるが、或いは、宮之浦式からの変化過程と見るべきか。

栗生をはじめ永田・楠川など屋久島周辺部や、天草島一部の単独語形○●型は、古いE式に似た面もあって注目されるが、助詞接続形の○○▼型を古い姿と見る事は難しい。その単独語形もつまりは、助詞接続形等の影響で鹿児島式から変化したものであらう。○●型になるとⅢ・Ⅳ・Ⅴ類と衝突する為、それを避ける必要があった訳である。

(3) 一方、表四の西南部諸方言のⅢ・Ⅳ・Ⅴ類については、概ね次の如き変化過程が考えられる。

●○○○▼(E式) ↓ ○●●○▼(宮之浦式) ↘ ○●●○▼(南肥後式)
 ○●●○▼(長島式) ↘ ○●●○▼(上甕島式)
 ○○○○▼(藤津式)

単独語形に関するE式↓宮之浦式の変化は問題がありそうだが、これについては、助詞接続形の影響という様な事情の他、Ⅰ・Ⅱ類単独語形との関係なども考え合わせるべきだろう。前述の如く、E式ではⅠ・Ⅱ類の単独形が○●型だった為、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類はそれとの衝突を避けて●○型をとらねばならなかったが、宮之浦式ではⅠ・Ⅱ類が●○型になった為、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類が○●型をとり得る様になったとも考えられるのである。

そう言えば、宮之浦式はE式と異り、屋久島（宮之浦の他、平内あたりにもその傾向がある）や肥前の三河内・早岐など各地で、かなりその分布が見られるが、これも或意味で、そのアクセントの安定性を示すと言えるか。E式に該当する方言としては、せいぜい枕崎や種子島北部あたりが挙げられる程度であり、而してそれも偶然の相似と見る立場があり得る事、前述の如くなのである。

長島式は宮之浦式のⅢ・Ⅳ・Ⅴ類助詞接続形が前記〔9〕の変化を起こしたものの。右記宮之浦式よりも更に安定的なアクセントであるらしく、鹿児島県大部分や長崎県南部・薩南諸島各地に広く認められる。宮之浦あたりでも稀に○●▼型が聞かれるのである。

右記の長島式に比し、南肥後式の○●▼型は、宮之浦式からの変化として、一見やや特殊な様だが、無理な推論とは言えない。現に宮之浦式の三河内・早岐あたりでは、○●▽〓○●▼のユレが時に認められ、その過渡期的存在とも見なされるし、また北薩摩でも長島東部や獅子島等は概ね南肥後式をとるのである（長島西部はいわゆる長島式）。Ⅰ・Ⅱ類の姿などからすれば一おう、長島式↓南肥後式の変化（○●▽↓○●▼、つまり変化〔8〕）が想定できそうだが、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類については、むしろ南肥後式↓長島式の変化（○●▽↓○●▼、つまり変化〔6〕）が考えられる。そういう意味で、表四の鹿児島諸方言の中には、南肥後式からの変化と見るべき場合があるのかもしれない。ただ、この○●▼型と○●▼型の差は、前記○●▽型と○●▽型の差などと同様、アクセント核に関与しない故、必ずしもはっきりしない面がある。

次に藤津式は、長島式のⅢ・Ⅳ・Ⅴ類が前記〔2〕及び〔7β〕の変化を起こしたもので、肥前東南部や肥後北部あたりにかなり認められる。

これに対し上甕島式は、長島式のⅢ・Ⅳ・Ⅴ類助詞接続形が〔7α〕の変化を起こすべき過渡期にあるとも言えるもの。薩南や甕島・黒島あたりに或程度認められるが、そこには、薩南喜入町など、概ね●○▼型の段階にとどまるものや、上甕島江石の●○▼型など、●○▼型に一步近付いたものもある。

六 いわゆる一型式について

九州の西北部から東南部にかけて、相当な広さの帯状で分布する一型アクセントは、何れも右記西南部式（または筑前式）の如き姿から変化したものと考えられる。例えば都城などの一型〔○○●●○▼〕は、概ね表四の鹿児島式におけるⅠ・Ⅱ類が前記〔4〕及び〔9〕の変化を起こし、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類に合併したものと見られる。平内式（屋久島一部）などはその中間的過程を示すとも言えよう。

ただ、同じく一型式と言っても、その調価は一樣でなく、右記都城式その他、〔●●○○○▼〕、〔●○○●●▼〕、〔○○●●○▼〕等々いろんな姿が認められる訳で、その成立過程についても、或程度の多様性が想定される。原則的には概ね、表四の西南部式諸方言からの変化が考えられそうだが、筑後あたりの一型式は、筑前式からの変化という様な可能性もある。そう言えば、表三の厳原式や豆酸式なども、〔●○○●○○▼〕一型に一步近付いたものと見られる事、前述の如くなのである。

七 九州諸方言アクセント分派の時期

（1）以上、巨視的な立場から九州諸方言アクセントの系譜を考えた。子細についてはなお問題もありそうだが、九州諸方言アクセントの系譜

大体の方向は動かないはずである。

例えば、日本の中央部に最も近い豊前・豊後地方のアクセントが、九州諸方言の古い姿を示すというのは、例の方言周圈論に矛盾する様だが、アクセント現象等に関しては、金田一春彦氏も説かれる如く、一般に中央語より辺域諸方言に新しい変化形が多い様である。現に近畿周辺部等のアクセントは概ね京都式から変化したものと見られるし、更には表五の如く、山陽式（出雲以外の山陰地方を含む）等のいわゆる乙種系アクセントも、京都式からの変化と見る説が有力なのである。もともと、個々の単語形分布については、いわゆる周圈論的解釈の適用できる場合が多い様だが、音変化現象等は、つとに西欧言語地理学者も指摘した如く、むしろ周辺部で起こり易いと言えようか。

(2) 所で、表五のA式（九州諸方言の祖アクセント）と京都アクセントとの分派は、概ね南北朝頃（京都でⅡⅢ類の合併した時期）以前に起こったと考えられる。九州諸方言の中、一型式をはじめ表三の筑前式諸方言等は、概ねⅡ・Ⅲ類が合併しているが、これは、それら諸方言独自の变化と見るべきものであり、南北朝期以降の京都方言が影響したと考える必要はない。

更に言えば、一拍名詞「果・齒・碁」の類が鹿児島方言で○▼型をとる事などは、溯つて鎌倉初期以前の分派を思わせるものがある。これらは概ね、院政・鎌倉初期頃の京都語で○●の变化を起こしたと見られるが、その变化完了後の京都語から分派したものであれば、「果」などの鹿児島アクセントは当然、「戸・実」の類と同様●▽型をとるはずなのである。

(3) 一方、九州諸方言アクセントの根幹が京都語と分派した時期は、他の日本語諸方言の場合と同様、中古期以降と思わせるものがある。これについては既に詳述した事があるが、九州諸方言（更に日本語諸方言）では、耳新しい漢語や外来語がいわゆる基本型に集中するのに対し、由緒深い漢語は次の如く、和語に準ずる地域的対応を示すのである。例えば、九類・画類・敵類・智恵類・毒類・千類・眉間類・地獄類・世界類・柘榴類・菖蒲類・太鼓類・最

後類などの漢語アクセントは、それぞれ和語の戸類（一拍Ⅰ類）・手類（同Ⅲ類）・鳥類（二拍Ⅰ類）・川類（同Ⅱ類）
 ・山類（同Ⅲ類）^{ヤマ}・笠類（同Ⅳ類）^{カサ}・形類（三拍Ⅰ類）^{カタチ}・頭類（同Ⅳ類）^{アタマ}・心類（同Ⅴ類 α ）^{ココロ}・命類（同Ⅴ類 β ）^{イノチ}・高サ類
 （同Ⅵ類 α ）^{ウサギ}・兎類（同Ⅵ類 β ）^{ウサギ}・兜類（同Ⅶ類）^{カブト}に準ずる方言的対応を示している。

これは結局、諸方言における伝統的漢語群のアクセントが、和語群と一緒に変化した為と考えられる。従って、諸方言アクセントの分派は概ね、漢語が話し言葉の中に浸透した頃以降に行われたと見られるのである。

八 アクセント以外の方言的特徴について

（１）アクセント以外の方言的特徴については詳述しないが、それらは概ね、アクセントに比し、中央語や他方言の影響が頻繁に起こり易い故、一般に、前記の如き方言分派関係の考察が困難である。即ち、△九州諸方言の音韻体系や文法体系が、何時頃中央語から分派したか▽という様な巨視的考察が難しく、むしろ、四ツカナの区別とか二段活用の残存等々、個々の現象につき、中央語史上の位置を考察すべきものの様である。

（１・１）しかし何れにしても、中古期以前の京都語の反映と見るべき方言的特徴は稀である。右記四ツカナの区別や二段活用の残存をはじめ、カ行合拗音・オ段長音の開合区別（中央語史のアウ対オウの区別が、概ねオ段長音対ウ段長音の区別等の形で残存）・セやゼの子音の口蓋性・推量辞ラウ形・格助詞ノ・ガの待遇表現的区別・敬語辞諸形（南九州に多い）などは、何れも、古い中央語の反映と言われる九州方言的特徴であるが、実際問題としてそれらは、概ね近代的京都語（ここでは中世末期頃以降の京都語を指す）でも存していたと見られる。

さし当り、大分地方の主格助詞イ形が、万葉や初期訓点資料のそれに關係ありとすれば、誠に古い中央語の反映という事になるが、もう少し新しい語の変化形でないかとも考えられる。今後の検討にまつ。その他、九州方言の比況法ゴタル形や形容詞終止形カ語尾（西九州の嬉シカ形）なども、それぞれ、中央語で比較的早く口語性を失ったらしい

ゴト（如）や形容詞カリ活用（助動詞接続形以外）を反映するものとして興味深いが、しかし、中世期の中央語で用いられなかったとは断言できない。なお、「ゴト＋アル」の形や、形容詞の單純終止法嬉シカ形自体は、中央語史上、稀である（中央語史のカリ活用も單純終止法は稀）故、一おう九州方言独自の發達と考えられる。

（2）一方、九州諸方言の相互關係についても、前記アクセントの場合の如きはつきりした系譜を考える事はできないが、さし当り前記第七項（1）に關連して、△豊前豊後方言にしばしば中央語の古い姿の反映が認められる▽事など、注目すべきであろう。

とりあえず薩隅方言との關係を考えても、敬語辞「モス・ゴワス・オジャス・タモル・マラスル」をはじめ、薩隅またはその属島方言に中央語の古形が残存する例も或程度存するが、その逆の例もまたかなり認められるのである。例えば右記主格助詞イや上二段活用（下二段活用は西九州でも相当広く認められる）・係結び「コソ＋已然形」の部分的残存等々は、九州でも特に大分県地方で著しいし、更には、語末母音弱化・長母音の短音化・ラ行子音脱落等の音変化現象が、薩隅地方で特に著しい事も、衆知の所であらう。

九 結びに代えて―附表（表一～表五）と付図

（1）最後に、本稿の考察結果を、表一～表五及びアクセント分布図の形で示しておく。

（2）これらの表や分布図の意味は、本稿の記述を一読する事により概ね明らかかなはずであるが、とりあえず若干の蛇足を加えてみよう。¹³

先ず表一～表四は、九州諸方言における二拍名詞（單獨語形及び一拍助動詞接続形）アクセントを整理し、それぞれの成立關係を考えたものである。参考として、九州以外の西日本諸方言アクセントとの關係を考えようとしたのが表五である。

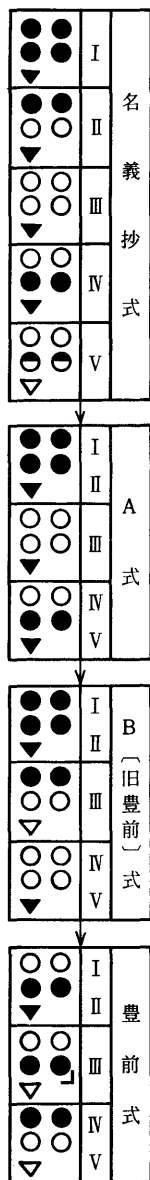
系譜関係を説明する為、現存しないアクセント体系を想定して掲げた場合があるが、それらは何れも、A式・B式等と称する事にした。

(2・1) 前述の如く本稿は、かなり一般論的な観点から変化の可能性を考えたものであり、細かい点では説明の及ばない部分もある。例えば、表一と表五のそれぞれに関し、下位の方言が、その上位の諸段階をすべて経由したとは限らないし、また逆に、それら諸段階の他に中間過程を想定せねばならない場合もあり得る。さし当り、表一のA式↓B式の中間過程においては、Ⅲ類が●○○●○○▼の如き型をとったという様な事も充分考えられる。また表四の鹿児島諸方言（鹿児島県大部分や宮崎県一部・薩南諸島一部等）には、長島式を経ず、E式や宮之浦式から直接的に変化した場合があるのかもしれない。

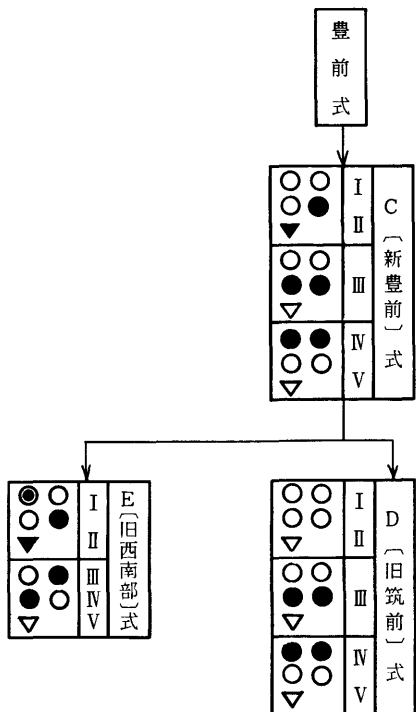
尚、本稿は概ね内的変化の面を中心に考えたが、実際問題としては、他方言の影響という事も大いにあり得る。個々の方言の成立関係については、もっともっと複雑な考察が必要かもしれない。

そういう意味で、表一と表五の矢印も、かなり抽象的一般論的な性格のものといえるが、ただ、△それぞれに関し、矢印と逆方向の変化は想定し難い△という程度の意味は持たせ得ようか。

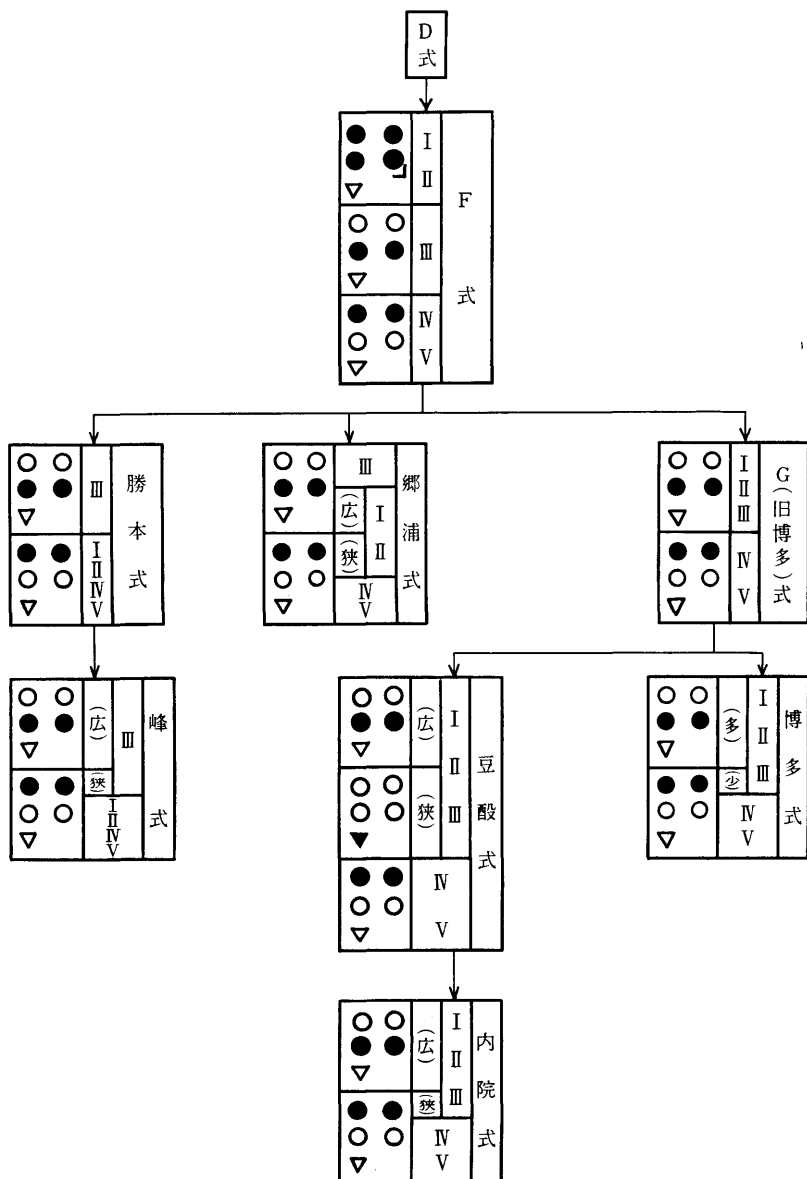
(表一) 豊前式アクセントの成立

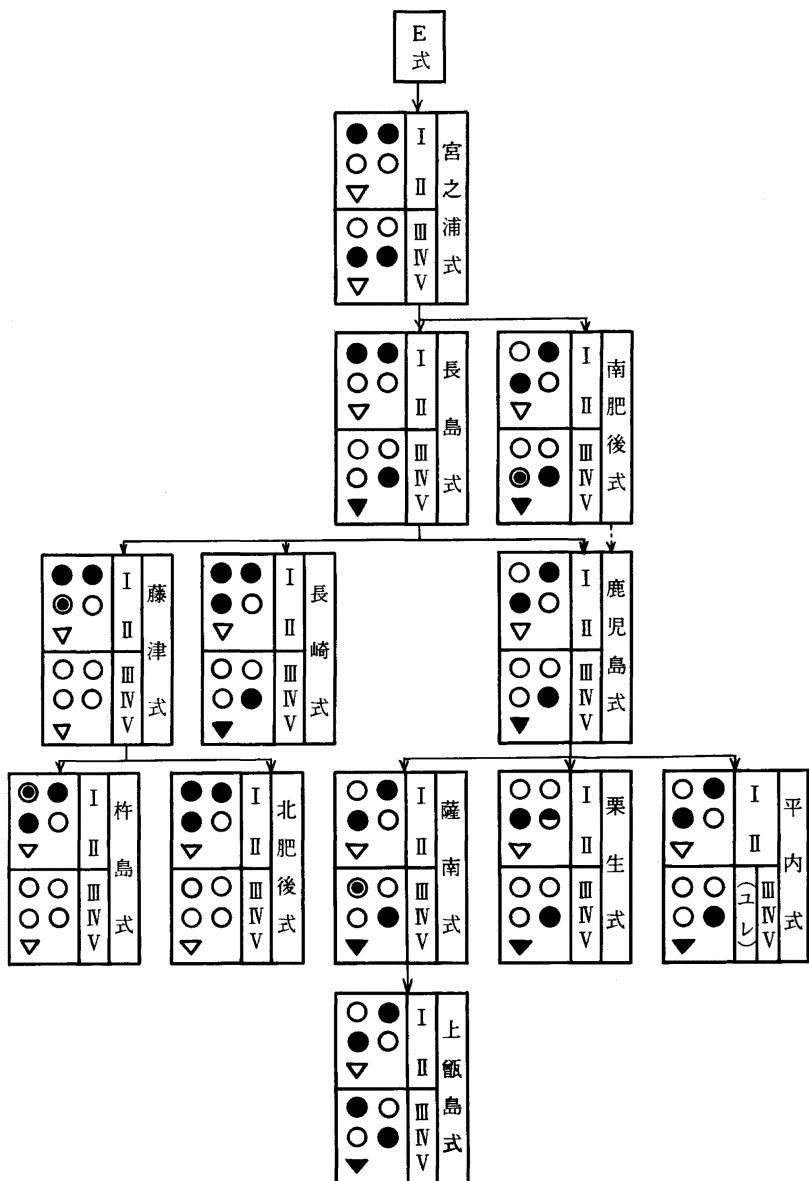


(表二) 筑前式と西南部式に分派

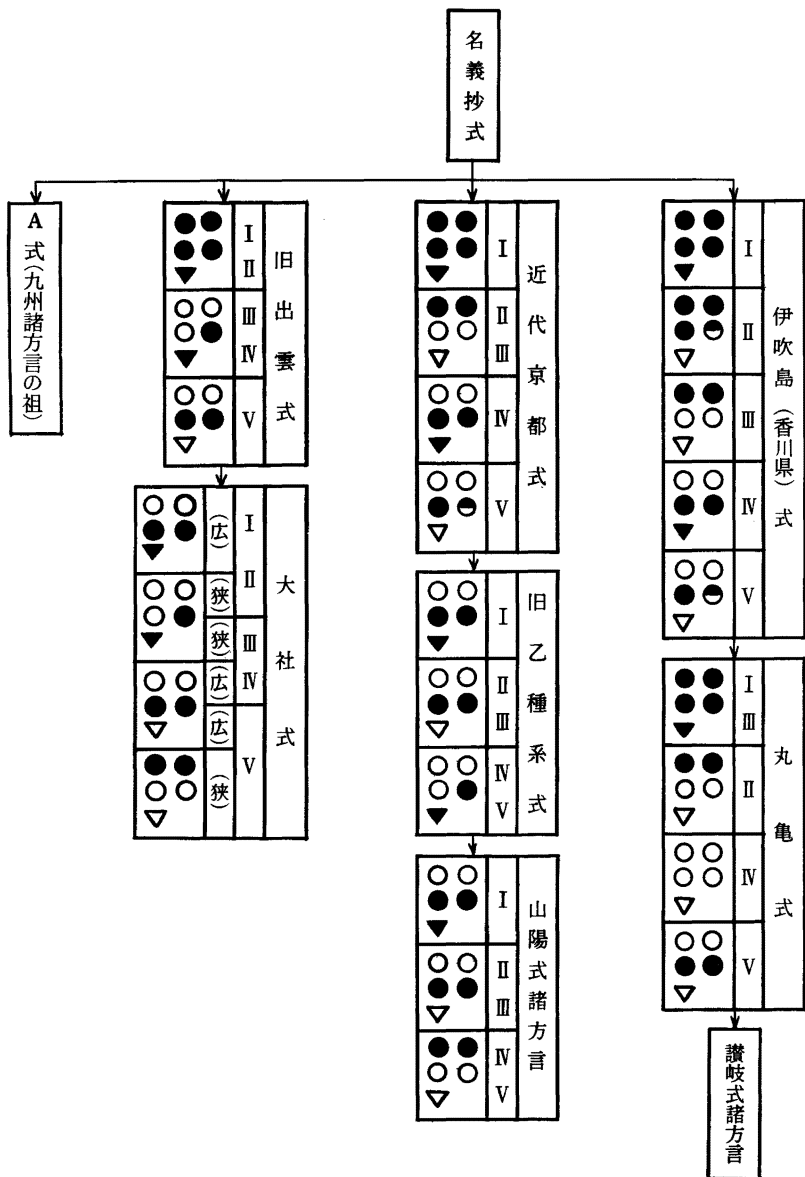


(表三) 筑前式諸方言アクセントの成立



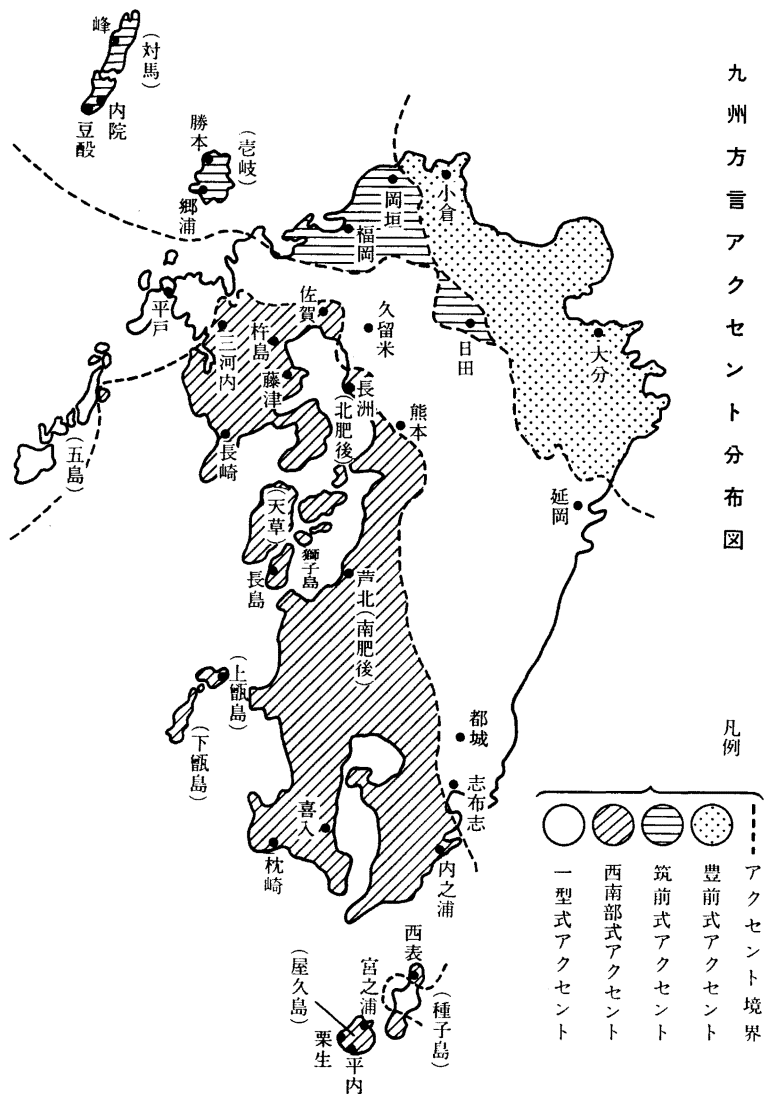


(表五) 西日本諸方言アクセントの成立



九州諸方言アクセントの系譜

九州方言アクセント分布図



【註】

(1) 九州諸方言アクセントについては先覚の御研究が多いが、特に、平山輝男氏『九州方言音調の研究』（昭和二六年学界之指針社）をはじめ、金田一春彦氏『日本の方言』（昭和五〇年教育出版社）・九州方言学会『九州方言の基礎的研究』（昭和四三年風間書房）、『音声の研究』7や『国語学』69集の平山輝男氏論文、『音声学会会報』65・66や『鹿児島大学文学科論集』2・8の上村孝二氏論文等は参照する所が多かった。

(2) 言語変化における内的変化と外的変化の關係については、『日本語の歴史』（汐文社『新日本語講座』④）71頁への拙稿等を参照の事。もともと言語は、そのアービトラリー性の故に、内的自然的変化の可能性を内蔵しているが、また言語以外の要因（経済的・政治的・社会的要因等）や、他の言語（方言の差を含む）の影響等に基く外的変化もあり得る。例えば中央語史における撥音・促音の発達に関しても、jōmie→jōmie (読)・katie→katie (勝) など、語中狭母音脱落という様な面から説明すれば、内的変化と見なされるが、また一方、これを外的変化として、漢字音の三内鼻音や入声音の影響等を想定する事もできようである。

(3) 本稿は一おう二拍名詞アクセントを中心に考えるが、I類～V類の如きアクセント型分類及びその所属語彙については、『国語学辞典』（東京堂）994頁などを参照の事。その一部を示すと次の如くである。

I類 梅・庭・箱……鳥・水…… II類 音・川・胸……石・夏…… III類 池・色・山……足・犬…… IV類 糸・稲・笠……海・松…… V類 雨・井戸・鮎……秋・春……

右の場合、各類所属語のうち第二拍広母音語を先に掲げ、同狭母音語を後に挙げた。

(4) 本稿のアクセント表示において、●・○はそれぞれ高音拍・低音拍を示す。また◎は高音・低音両様に実現する可能性のある拍を示す。なお、▼・▽などはガ・ニ・ヲの如き一拍助詞のアクセントを示す。

(5) 本稿では、概ねこの様な原則によりアクセント変化を説明しようとする。本稿で変化〔2〕と云えば、すべて○●↓○○の変化を指し、変化〔1b〕と云えば●○○↓○○の変化を意味する。尚、二拍名詞＋一拍助詞の形○●▼・●○○▼が、それぞれ三拍語○●○○・○○○に準ずるものである事、言をまつまい。

(6) これについては、昭和五一年九月島根大学国語国文学会講演会で話した事がある。第二拍狭母音語に関しIV・V類の区別が存する事は、一おう動かないと思うが、唯、大社方言でIII・IV類が完全に合併しているかどうかは、検討の余地もある。

(7) アクセント変化の〔3a〕・〔7a〕などに関しては、すべて前記第一項(2)「アクセント変化の一般的方向」を参照された九州諸方言アクセントの系譜

い。以下同様。なお二拍名詞十一拍助詞の形のアクセント変化〔○○○▼↓●○○〕は、前記三拍語の〔○○○●↓●○○〕に準ずるものである事勿論である。註5をも参照の事。

- (8) 『音声学会会報』84・85の山名邦男氏論文、『国語研究』(国学院雑誌) 21・22の金田一春彦氏論文、同誌22和田実氏論文等参照の事。

- (9) 『国語学』69集の平山輝男氏論文でも、この枕崎方言によく似た種子島西表方言アクセントを、他の西南部式諸方言から変化した新しい姿と見なしていられる。

- (10) 本稿のアクセント型語彙分類において、

(広)	I
(狭)	II

などの(広)(狭)はそれぞれ、第二拍広母音語・同狭母音語を

指す。註3をも参照の事。以下同様。

- (11) 『文学』22巻8号その他の金田一春彦氏論文を参照されたい。

- (12) 諸方言アクセント分派の時期については、『講座国語史2巻』(昭和四七年大修館) 166頁々や『方言研究叢書3巻』(昭和四九年三弥井書店) その他の拙稿を参照の事。

- (13) 更に蛇足を重ねると、例えば表一の豊前式で、III類の単独形を○●としたのは、I・II類の○●と区別がある事を示すためである。音声学的には○●とすべきかもしれない。表三のF式におけるI・II類単独形の●●も、概ねそれに準ずるが、この場合の調価は●●に近いものだったかもしれない。表五の伊吹島式におけるII類の調価などよく検討すべきであらう。

※ 表二のE式におけるI・II類の●は、高音・低音の両様に発音され得る事を示す。

※ 表三の郷浦式における

(広)	I
(狭)	II

などの(広)(狭)については、注(10)を参照の事。結局、郷浦式ではI

・II類の庭・川^{ニカガ}などが、III類語大部分と共に○●・○●○▼型をとり、I・II類の鳥・石^{イシ}などが、IV・V類語大部分と共に○●・○●○▼型をとる訳である。

※ アクセント分布図は、巨視的観点から九州諸方言を、豊前式・筑前式・西南部式・一型式の四種に分ち、その分布を示したものの。この他に、いわゆる曖昧式アクセントを一区域として示す立場もあるが、『曖昧』の概念も曖昧である。見方によっては、九州のかんりの地域がそれに含まれそうである。

右記四種のそれぞれを、更に下位区分し得る事など言をまつまい。この場合、彦岐や対馬島内の下位区分は、かなりは

つきりした境界がひけそうだが、西南部式の下位区分などは、必ずしも境界の明らかでない場合がある。
種子島や五島地方をはじめ、各地における西南部式と一型式の境界については、今後の検討にまつ部分もある。